

河北省邢台発見の獸頭人身十二支俑について

はじめに 『河北省考古文集（三）』に河北省邢台威県から注目すべき獸頭人身十二支俑が出土していることが報告された¹⁾。

邢台は、北京の南西約360km、省都石家荘の南約120kmの河北省南西部に位置する。唐代、白磁や三彩を量産したことで著名な邢窯もここに所在する（図64）。

ことの発端は、2003年、唐代の磚室墓を中心とする漢代から元代の古墓10数基が、土取により破壊され、大量に出土した遺物が持ち去られたことにある。その後、200点以上の遺物が回収された。今回とりあげる獸頭人身十二支俑も、その中のものである。



図64 関連位置図

獸頭人身十二支俑 2種類あり、報告者はA、B両型に分類している。今回取り上げるのはA型である。これは、低い方形台上に立つもので、高さ20～21cm。右衽の円襟、筒袖の長袍を着用し、腰に細帯を締める。帯の先は、背面で帯をくぐり、中央で短く下方に垂れる。長袍の下には、ズボン状の袴をはく。両手を胸前で拱手する。子、丑、酉が確認されている。丑が2点、酉が3点あり、複数セットが存在したと考えられる（図65の1）。

発見の意義 このA型十二支俑は、筒袖の長袍の着用、全体の姿勢・形状などで遼寧省朝陽市黄河路墓出土の陶俑（図65の2）と類似する²⁾。黄河路墓例は8世紀前葉のものとされ、中国北半では最古の獸頭人身十二支俑の1つである。獸頭人身十二支像は、坐像として長江流域で先行して盛行した。その立像化と中国北半での拡散の過程が、ほぼ同時期に描かれたキトラ古墳壁画の十二支像の

起源を推定する上で鍵になると考えている。今回の発見により、黄河路墓例は、河北省南西部のものと密接な関係にあることが判明した。黄河路墓については、その他の出土品や墓の構造の特徴に邢台近隣の南和县郭祥墓（688年）との類似性が指摘されており、十二支俑についてもこれを裏付けたことになる。なお、邢台例の年代を詳らかにすることはできないが、陶器や動物俑は、山西省襄垣唐墓（652年）に類似するとされた。

かつて、筆者は、揚州地区と北京、朝陽などの北方地区を結ぶ大運河などの交通路にそって獸頭人身十二支像が分布域を拡大する中で生じた変異の一つがキトラ古墳壁画の十二支像の原型となったものであり、両地区間に位置する山東・河北両省の様相把握が重要と述べた³⁾。今回の発見で、河北から朝陽にかけては、筒袖の長袍をまとい、拱手するものが分布し、広袖の長袍を着て武器をもつキトラ古墳の十二支像とは関連を見出せないことが明らかになった。消去法でいけば、山東半島から揚州にかけての地域の様相が重要な意味をもつ可能性が高まったといえるかもしれない。

今回取り上げなかったB型も他に類例をみない。今後とも調査を進めていきたい。（加藤真二）

註

- 1) 邢台市文物管理处ほか「邢台威県后郭固出土漢唐至金元文物」『河北省考古文集（三）』科学出版社、2007。
- 2) 遼寧省文物考古研究所ほか「遼寧朝陽市黄河路唐墓的清理」『考古』407、2001。
- 3) 加藤真二「中国における獸頭人身十二支像の展開」『紀要2005』。



図65 A型十二支俑（左：邢台威県、右：黄河路墓）